

【第四〇回大会公開講演】

北海道民間説話を探る

―伝説「紅スズラン」事例再考―

阿部 敏夫

はじめに

筆者は、「今回は具体的事例に焦点を絞って北海道の口承文芸について講演して欲しい」という学会事務局からのご依頼でしたので、創作アイヌ伝説「紅スズラン」の内容考察、スズランに対するアイヌ・和人等の文化的異質性とその評価、今回の事例を通してみえる北海道民間話生成とその研究の課題を考察することにしました。

北海道内に伝承されている紅スズラン伝説は、「不思議な人」・「血に咲く鈴蘭」（青木純二）『アイヌの傳説と其情話』富貴堂書房、大正十三）、「鈴蘭の花敷で」（工藤梅次郎）『アイヌ民話』工藤書店、大正十五）、「戀人競ふ上川の妖精 流血は染む鈴蘭の花」（石附舟江）『傳説蝦夷哀話集』昭和十一）、「すゞらん」（北海道小学校長編）『北海道小学読本 尋常四年上巻七』日本教育出版社、昭和十二、昭和十六年版再掲）、「スズラン」（更科源蔵・更科光）『コタン生物記Ⅰ、長万部の古老談』法政大学出版局、一九七六、

「赤いスズラン―函館市―」（文・小松博子、北海道郷土教育研究会編）『北海道の伝説』日本標準、昭和五十六）、「紅スズランになったメノコ」（文・清水俊宣）『厚真開拓絵物語 ふるさと昔、むかし』厚真町、昭和六十二）等に紹介されている。

これらの紅スズラン伝説について、更科源蔵・更科光「コタン生物記Ⅰ」は、「本当に昔から伝承されたものであるか、それとも日本人の創作によるものであるかはつきりしないが、（中略）日本人の創意が感じられる」、脇哲は「道花にも指定されている鈴蘭の人気の高さは、一にかかつてその容姿の可憐な風情にあるらしい。べた惚れが極まって、『如意輪觀世音のかんばせ』と形容した花卉研究者もいるのだが、その伝説は予想に反して寥々たるものである。（中略）元來鈴蘭は毒草なのだから、牛や馬でさえそっぽをむく。であればこそ山野豊饒に群生する。はなはだ生活的でリアリストたるアイヌは、こんな無益有害な花に関心を寄せるわけはない。鈴蘭伝説の不毛もうなずけようものである。」（「紅鈴蘭伝説の虚実―オコタンペで死んだ浄瑠璃姫」『新北海道伝説考』北

海道出版企画センター、昭和五十九）等と各氏は考察している。⁽¹⁾

I. アイヌ文化と「スズラン」

(1) 出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
(2016/05/07付) の説明

スズラン（鈴蘭、学名 *convallaria majalis*）は、スズラン亜科スズラン属に属する多年草の一種。君影草（きみかげそう）、谷間の姫百合（たにまのひめゆり）の別名もある。強心配糖体のコンバラトキシン (*convallatoxin*)、コンバラマリニン (*convallamarin*)、コンバラロシド (*convallaside*) などを含む有毒植物。有毒物質は全草に持つが、特に花や根に多く含まれる。摂取した場合、嘔吐、頭痛、眩暈、心不全、血圧低下、心臓麻痺などの症状を起こし、重症の場合は死に至る。

北海道などで山菜として珍重されるギョウジャニンニクと外見が似ていることもあり、誤って摂取中毒症状を起こす例が見られる。スズランをかけた水を飲んでも中毒を起こすことがあり、これらを誤飲して死亡した例もある。

スズラン属の日本在来変種は *convallaria* のみであり、本州中部以北、東北、北海道の高地に多く自生する。北海道を代表する花として知られる。花には強い芳香がある。観賞用に栽培されているもの多くはヨーロッパ原産のドイツスズラン (*c.m.yamajalis*) である。日本に野生するスズランと比べると大型で、花の香りが強い。またスズランの花茎が葉より短いのに

比べ、ドイツスズランは花茎が葉と同じ長さかそれ以上に伸びる。花色は白が普通だが桃、紅などもあり、葉に斑（縞）の入った品種もある。なお、エゾスズラン (*epipactis papillosa*) は、ラン科の植物である。

北海道の自治体でも「まちの花」として「札幌市・砂川市・恵庭市・釧路市・美瑛町・平取町（同町芽生）・日本最大の野生スズラン群生地約 15ha 所在）・幕別町・音更町」が指定している。

(2) 射水基「べにすずらん」余話」の解説⁽²⁾

……アイヌ名はセタキト (*Seta-Kito*) といい、セタ (*Seta*) は犬、キト (*Kito*) はアイヌネギ (ギョウジャニンニク)、すなわち犬のネギの意となる。彼等 (注アイヌ民族) にとってアイヌネギは大切な食べ物であったが、生育状態の良く似ているスズランは食用とはならず、従って彼等は「セタキト」(これは犬のネギだ) と呼んでいた。花言葉は「幸福の帰来」で、これにちなみ、「あなたの幸福を祈る」の意をもった花であり、またこの可憐さ乙女の純潔を表徴するとさえいわれている花である。スズランの葉は、我が国で古くから培養されている蘭や葉蘭に似ているところから、ランの名がつけられ、花は風鈴などの鈴に似ているので、鈴のような蘭の意味からスズランと名づけられたのではなからうか。谷間の姫百合となると、何か山間の奥地にも自生しているように思われるが、ヨーロッパの場合、乾燥気味な、冷涼な初夏の気候なので、谷間にも生育しているのか

も知れないが、高温多湿の我が国では、とても谷間などスズランは生育しない。従って冷涼で乾燥するところといえは高原である。九州の一部から本州、北海道にかけて自生するスズランも、九州や本州では高原の植物で、南アルプスの高原や戸隠高原に大群落があるという。信濃の高原から北地にかけては、平原にも自生しているという。北海道の主な群落としては、樽前山麓の白老、早来を始め、広島、島松の原野、函館の湯の川附近、十勝の高原、阿寒の山麓などが知られる。(中略) 北海道の場合、スズランはやせ地に生育しており、スズランの生育している地帯は普通農耕不適地としてレットルが張られている。やせ地の現地スズランと、肥沃な花壇に植えられてあるドイツスズランを比較すれば、日本種の方が見劣りするのとは当然のことである。

(3) 『里真志保著作集別巻1、分類アイヌ語辞典植物編』平凡社、一九七六(昭和五十一) 202~203頁

§ 340 スズラン キミカゲソオ

(1) 《幌別、沙流》(2) 《真岡、白濱》(3) 《大泊》(4) 《A十勝》(5) 《A沙流》(6) 《A千歳》の事例報告を記載し、「(参考) 葉が似ているくせに食用にならぬとゆうので『犬のギョオジャニンニクの葉』とか『キツネのギョオジャニンニクの葉』とか悪口を云ったのである。」と同書は解説している。

(4) 川村正一編『アイヌ語の動植物探集』文泉堂、二〇〇五

(平成十七)、134頁「スズラン」

スズラン ゆり科 シタプクサ イヌのギョオジャニンニクの葉

日高 十勝 樺太 沙流川筋 十勝川筋 千歳川筋の16の事例報告をしている。「犬のアイヌ葱」「狐共の草」「狐達の食う赤い實」「キツネの草」「キツネのイチゴ」と同書は解説している。

(5) 山田孝子『アイヌの世界観』講談社選書メチエ24、一九九四(平成六)、131~133頁

動物をあらわす属詞「チカブとセタ」の項目中に「スズラン」とギョウジャニンニクとは葉の形が非常に似ている。後者の葉が食用、薬用として重要であるのに対し、スズランは全草に強心配糖体のコンバラトキシンを含み毒性が強く、その葉は食用にはできない。」と同書は解説している。

以上のような事例報告からも、アイヌ民族とスズランの関係が考察できる。しかし、伝説「紅スズラン」にはアイヌ民族が登場している。次節では、「北海道小学校郷土読本」に掲載されている「スズラン」伝説について紹介する。

II. 北海道小学校長會編纂『北海道廳推奨 北海道小
學讀本 尋常四年上巻』

昭和十二年三月二十日、「七、すゞらん」について

七、すゞらん

今年もまた、すゞらんが咲く頃となりました。

あのまつしろな、つりがね形をした、いゝにほひの花は、ほんたうになつかしい花です。

この花について面白い話があります。

松前のある村に、親も兄弟もない一人ぼつちの若者がゐました。大へんまじめで毎日よくせつせとはたらいてゐました。

ある日のこと、畑に出てはたらいて居りましたら、今まで晴れきつてゐた空が急にまつくろになつて、風は起る、砂はとぶ、石はころがるといふ大へんなあらしになつて来ました。

若者はあまりのひどい嵐におそろしくなつて家へ帰らうとしますと、嵐のために今にも吹き倒されさうな女の人が、

「助けて下さい。」

とさげんでゐました。

そして

「どうか畑の中へかくして下さい。後から大嵐が私を追つかけて……それが来ましたら私はもう西へ行つたといつて下さい。」

といふ間もなく、魔物のやうな大嵐が、恐ろしいやうなりをたてながらやつて来ました。

若者は地べたにしがみつきながら、

「女は西へ行つた。」

と叫びました。

大嵐はこの言葉を聞くと西へずんずんと進んでいきました。

「おかげで助かりました。恩がへしのしるしにこのマキリを上

げます。このマキリを持つて居れば、なんでものぞみものがえられるでせう。」

そのことばの終らぬうちに、女の姿はけむりのやうに消えてしまひました。

若者が、あまりのふしぎにあつげにとられてゐると、どこからともなく雪のやうな、星のやうな花がふつて来て、若者のまはりをうづめました。

この花こそ、私たちが大好きな、すゞらんであると云はれてゐます。

すゞらんは空にかゝやく星のやうな花をつけて、やさしいにほひをたゞよはすけれども、風にはひどく弱い花です。(原文総ルビ)

原文頭注

すゞらん リリーといつている人もあります 六月の中ごろ、ちや

うど札幌神社祭のころさきます

松前 今の福山、内地に一ばん近いところ

マキリ 小がたなこと

昭和十二年版『北海道小學讀本』日本教育出版社(三十三〜三十五頁)が編纂されるまでは、以下のような改訂作業の変遷がある。

(一) 北海道小学校長會編纂『北海道廳推奨 北海道小學郷土讀本 卷七』「六、リリー」日本教育出版社

昭和六年三月廿五日版(三十三〜三十七頁)では、「郷土讀本」として編纂されている。頭注は、次のように記述されている。

「本州 北海道の人のいふ内地のうちのおもな部分です／松前
今の福山、内地に二ばん近いところ／マキリ 小がたなのこと」

(2) 第二版 昭和七年三月廿五日版では、タイトルが「リリー」から「すゞらん」へ変わり、頭注は「すゞらん リリー」といつてゐる人もあります 六月の中ごろ、ちやうど札幌神社祭のころさきます」松前、マキリの記述は、(1)と同じ内容である。

(3) 昭和十年三月廿五日発行本は、第二版と同内容である。

第二版から「小學讀本」となり、頭注の説明、昭和六年版の本文は、「リリーは北海道、千島から太にさく花です。その外、内地にも高い山にさくところもあります、北海道のリリーはにほひもよく名高いものです。」「……いりやうの品…女は天女であったのです。……天から……(北海道小學新聞)」のように加除、表記変更されている。

Ⅲ. 「リリー」「すゞらん」の典拠について

Ⅱ. の『北海道小學郷土讀本』の「典拠」は、次の(1)、(2)の資料である。

(1) 『北海道小學郷土讀本編纂趣意書並二典拠／札幌市女子高等小学校内北海道小学校長会編纂』

日本教育出版社、昭和六年四月十日⁽³⁾
尋常四年用 巻七 題材の解説 六、リリー

趣旨 今では本道の代表的な花ともなつてゐる鈴蘭を伝説的詩的に表現した文なので採りました。

典拠 調べたがはっきりしません。飯田広太郎氏の讀方教育の中にありましたので取りました。讀方教育には北海道小學新聞から取つたとありますが、その出所が明ではありません。御存知の方あらば御知らせ願ひます。⁽⁴⁾

(2) 飯田広太郎『讀方教育』(北海道出版社、大正十五年十二月二十日)⁽⁵⁾の「第五編 私の讀本 十」に次のように紹介、解説されている。

ツクエ^机 ノ ウ^上ヘ ノ 一リン ザシ。 リリー ノ ハナ^花
ガ ニホッテ^ル。 チヒサナ^小 スズ^鈴 ヲ フリナガラ、
ワタシ^私 ヲ ヨンデ キルヤウ^ダ。
十、リリー

リリー(鈴蘭)は、北海道の花として、子供達にもどんなにか懐しまれてゐることです。大きな束よりは、一輪ざし、三つ四つあの小さな鈴をならべた姿こそ、リリーには相応しい姿であらうと思ひます。匂ひもよいでせうが、匂ひよりはあの可憐な、そして純白な形と色とに、人の心がひらかれるかと思はれます。机に向つてふと顔をあげた時、あの小さなリリーが、純白の鈴をふりながら、淋しさうに呼んでゐるや

うな姿を見たとき、かうした時心が、子供の胸に浮かんで来るのは自然のことかと思はれます。「チヒサナ。キルヤウダ。の読み方に注意がいきます。」

IV. 「スズラン」に関連する記事

「はじめに」で紹介した資料とともに北海道移住民（和人）が「スズラン」に対してどのような「思い」を持っているのかを紹介する。

(1) 「躍進 北海道の景観 写真帳」稲葉屋紙店出版部、昭和十二年に刊行された写真帳の目次は次のように「スズラン」は紹介されている。

目次 ◎北海道景勝略図 十一州を統べる 1頁／初夏の野に薫る鈴蘭 2頁／雪の平原と山の家 3頁／都市編 4頁（18頁（略）／産業編 29〜44頁（略）／……終……

「初夏の野に薫る鈴蘭」の項目の説明は以下の通りである。蝦夷の天地にも春が訪れた五月、山の樹々が新緑の衣裳を纏ひ、野の若草も育つて香くはしい初夏の微風が吹き始めると、この可憐な鈴蘭の花スワブキナも綻び出すのである。嬉々として楽しむのは花ばかりではない、アイヌの若人も又森蔭に、川の畔に恋を囁く、だが時にこれは悲劇に終る。かうしてサンバズクとアンリシカはオペルペルプの流に哀を止どめカバラベとキロロアンは鈴蘭を赤く染めた。今に鈴蘭の香は若人

の胸を怪しく振はせるのである。

(2) 旅行ガイド本『北海道の旅情』日本国有鉄道札幌鉄道管理局、昭和二十八年、五十二〜五十三頁には次のように「スズラン」は紹介されている。

◆鈴蘭（室蘭本線、錦多峰・沼の端・遠浅・早来・安平駅下車）

谷間の姫百合ともいいう鈴蘭は、苦小牧から追分に至る室蘭線の沿線多く、六月の初から野も丘も一面に可憐な花の放つ香に包まれる。鈴蘭はユリ科に属する宿根草で、葉は二三葉を根生し、長柄を具えている。花茎は斜に出て五、六寸になり、その先に鈴形の白い小花を七箇から十箇をつけ、若い人々のあこがれの花として親しまれている。

(3) 厚真町総務課広報広聴係編『厚真開拓絵物語 ふるさと昔むかし』北海道厚真町、昭和六十二年発行、九〜十頁には、「紅スズランになったメノコ」伝説と絵が添えられて掲載されている。その「伝説」は、『厚真村史』昭和三十一年版の「(三) 紅すずらん」伝説を原本にして再話したものである。

紅スズランになったメノコ

その昔、厚真川の上流のほうに、トンニカというコタンがあった。

ここの酋長のオタクミは勇敢で、クマ狩りの名人であったが、ふだんは物静かで仲間からたいへん慕われていた。

オタクミには、美しい心優しいトコンマという娘がいた。コタンの人たちは、美しいトコンマを平和の神さまの使いと信じていた。

事実、トコンマが生まれてからは、ほかのコタンと一度も戦が起こらなかった。

人びとは厚真川に小舟を浮かべて漁をしたり、狩りをして平和な日々を送っていた。

ところがある日、日高の戦いの好きなコタンが、トンニカコタンの侵略を企て、十年以上も続いた平和な生活を一瞬間に打ち壊してしまった。

オタクミは部下を率いて果敢に戦ったが、ついに力つきて倒れてしまった。

オタクミはトコンマを呼び寄せ、「この仇を必ず討つてくれ」と頼んでこの世を去った。

トコンマは仇討ちを誓い、残った仲間を従えて、勇ましく敵陣に突進した。

血の雨が降る戦さの中でも、美しくまばゆいトコンマの姿は、戦場に咲いた大輪の花のようだったという。

しかし、味方は次々に倒れ、トコンマも捕らわれの身となっていました。

その美しさに命だけは奪われなかったが、父の仇討ちをできなかったトコンマは、嘆き悲しんで、自ら乳房にタシロを突き刺し、父のあとを追った。

ところが不思議なことに、トコンマの真っ赤な血はどまることなく、こんこんと流れ続け、やがて小さな沢をつくった。それ以後、トコンマが死んだこの沢の近くに咲くスズランは赤く染まるようになった。

そして、いつしか、このすずらんのことを「紅スズラン」と呼ぶようになった。

おわりに 考察と課題

(1) 先行研究として「北海道の民間説話についての考察―創作アイヌ伝説「紅スズラン」を事例として―」『昔話―研究と資料―』第37号(日本昔話学会、二〇〇九年三月)に発表した筆者の考察がある。その「おわりに」の章に以下の七項目を確認している。その七項目を踏まえての今回の発題である。

一、アイヌ説話とは異なる文化認識で「アイヌ説話(民話・伝説)」が創作されて今日まで伝承されている。二、アイヌ民族にとつては、脇哲や知里真志保の指摘のようにスズランはアイヌ民族にとつては生活に役に立たないものであり、毒薬であるので説話のなかに伝承される事はない。従つてスズランに対する日本の美意識と悲劇性とが、結びついて「アイヌ説話」として創作されたものである。三、青木純二、工藤梅次郎は、アイヌ民族を「衰残」「旧習古俗」の民族として認識してのアイヌ説話集編纂を行っている。四、日本の近代化の中で「日本民族認識(日本、日本人論)」の高揚とアイヌ民族の皇民化認識とが連

動している。五、明治三十二年の北海道旧土人保護法の制定から二十余年後の時点で、アイヌ民族の皇民化教育が進行する中、アイヌ民話集が和人によって編纂されている。六、特にアイヌ民族の文化に興味を持つている新聞人によって編纂されていることは一般の人に対する影響力が大きい。七、伝説「紅スズラン」の事例は、アイヌ民族のアイデンティティとは無関係であり、その無関係の伝説が、現在も変容し続けている。民間説話の伝承の問題を考察するための一つの事例である。

この確認は、本発題の骨子であり、北海道における学校教育の場や写真集、旅行ガイド編纂に至るまでのいろいろな場でも創作・変容されて今日まで伝承されていることを再確認した。

(2) 今回の発題は、特に『小學校「郷土」讀本』を通しての伝説伝承について考察した。

昭和初期の「村岡花子・小学讀本」にみられるようにスズランの「幸せ、可憐さ」「厳しい冬から」解放される季節に咲く花としての存在が「讀本」編纂や児童に影響を与えたであろうことは推測される。写真集・旅行ガイドとしての普及と連動して北海道のスズランの存在を誇示したと考える。

(3) 筆者は二十数年前、研究会会員とともに「伝説の地」を採訪したことがある。もちろん紅スズランを発見することが出来なかった。しかし、スズランと似た「ベニバナイチヤクソウ」

「ギョウジャニンニクの花」を発見した。筆者にはそれらの花が紅スズランを連想したのかもしれないと思われた。スズランへの日本(和人)的美意識と上記の花とが混在して本稿「はじめ」で紹介した創作アイヌ伝説「紅スズラン」が誕生の一つの背景にもなっていると考ええる。そして、大正期の創作「アイヌ民話」伝承が第二次世界大戦以後も、登場人物もメノコと松前武士との悲恋物語としても広く伝承されて行く。今回は一話の創作「アイヌ伝説」を通して発題した。筆者は、この事例は今後の口承文芸研究上常に看過出来ない問題を含んでいるのではないかと考える。書承から口承へ、口承から書承へのサイクルを繰り返しながら時空間のなかで変容しながら伝承されて行くと考ええる。

注

- (1) 「北海道の民間説話についての考察―創作アイヌ伝説「紅スズラン」を事例として―」『昔話―研究と資料―』第37号(日本昔話学会、二〇〇九年三月)
- (2) 『北海道の文化 19』北海道文化財保護協会、昭和四十五年七月一日、二〇五頁要約引用。
- (3) 昭和九年版から引用
- (4) 「北海道小学新聞」の所在は現在までは未確認。
- (5) 昭和三年四月一日三版、一四六―一四八頁、四〇六―四〇七頁から引用

(あべ・としお／元北星学園大学)